OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ユング＝シュティリングの敬虔主義批判 : エルバーフェルト体験と『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活』
Author(s)	長谷川, 健一
Citation	ドイツ啓蒙主義研究. 2019, 16, p. 21-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72768
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ユング＝シュティリングの敬虔主義批判

―エルバーフェルト体験と『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活』―

長谷川　健一

はじめに

晩年にバーデン大公カール・フリードリヒの信仰顧問に招聘された作家ヨーハン・ハインリヒ・ユング（1741-1817、通称ユング＝シュティリング、以下ユングと略記）は、その地で数々の宗教的著作を執筆するのみならず、書簡や直接の訪問等による牧会活動にも力を注ぎ、「覚醒の太祖」と呼ばれるに至った。もともとは仕立屋および教師の息子として生まれ、その後、教師や職人、家庭教師、工場支配人など様々な職を転々としながらも、最終的に驚くべき社会的上昇を果たしたユングであるが、三十代の数年間については、まさに苦難の時代として記憶に留めている。そして、この時代の舞台となったのが、ドイツ西北部のベルク地方に位置し、商工業で栄えた町エルバーフェルト Elberfeld である。現在ではヴッパータール市の一部となっている。

1772 年、シュトラースブルク大学で医学を修めたユングは、新妻クリスティーネとともに、このエルバーフェルトの町に移り住み、開業医としてのキャリアをスタートさせた。その際、近隣の町ロンスドルフに住む義理の両親から多額の借金をしなければならなかったが、そのおかげでこの新しい職業生活への期待を胸に一歩を踏み出すことができた。エルバーフェルトの住民には、かつての友人や知人、すなわちユングの敬虔な信仰にかねてより一目おいていた敬虔主義者たちがいた[1]。ところが、やがてその彼らによってユングは激しい批判を受けるようになり、この町を去ることを余儀なくされる。そのため、エルバーフェルト時代（1772-1778）の記憶は、その後のユングと敬虔主義の関係に少なからぬ影響を及ぼしている。

では、この敬虔主義者たちとはいったいどのような人々であったのか。彼らはなぜユングを批判したのか。また、彼らの批判は、ユングの敬虔主義批判にどのような影響を与えたのか。こうした問題を考えるために、本論では、ユングの自伝的小説第 4 巻『ヘンリヒ・シュティリングの家庭生活. 本当にあった話』(1789) Henrich Stillings häusliches Leben. Eine wahrhafte Geschichte（以下『家庭生活』と略記）の前半部分の記述、すなわちエルバーフェルト時代のユングの描写に着目し、そこに現れたユングの敬虔主義批判を分析する[2]。また、その批判の背景にあるユングの狙いについても考えてみたい。

なお、本研究の最終的な到達目標は、ユングの敬虔主義批判と彼の「熱狂」Schwärmerei

評価の関係を分析・考察することにある。熱狂といえば、迷信・迷妄の廃絶と並んで、啓蒙主義が克服すべき課題[3]として掲げていたものだが、ユングはまさにその問題を正面から取り上げ、そこに敬虔主義に対する評価を絡めた独特な議論を展開した。したがって、本研究はユングと啓蒙主義の関係の検証をも視野に入れるものであるが、本稿自体は、その考察の足掛かりを得るための準備作業という位置付けとなる。

１．敬虔主義とエルバーフェルト

作家ユングとその宗教的著作は、しばしば「敬虔主義」Pietismus との関係で論じられるが、ユング自身が敬虔主義者であったか否かについては、これまでさまざまな議論がなされてきた[4]。いずれにしても、ユングが敬虔主義から影響を受けていたこと自体は紛れもない事実であるが、自らの信仰と敬虔主義との関係をどのように捉えていたかは、時代によって明らかな差があったことを看過してはならない。エルバーフェルトを離れた後の時代、すなわち 1778 年から 1780 年代にかけて大学の教授職に就いていた時期は、敬虔主義と自らの信仰との間に線を引き、敬虔主義から距離を置く姿勢を最も強く打ち出した時期であった。この姿勢に影響を及ぼしたのが、エルバーフェルトでの体験であったと推察される。

ところで、一口に敬虔主義と言っても、指導者や地域や時代によって極めて多様な展開を見せたため、ユングの敬虔主義批判を考える際にも、ユングが批判の矛先を向けていた対象を把握しておく必要がある。敬虔主義は、17 世紀後半のドイツ・プロテスタントにおいて興った教会改革運動ないしは信仰覚醒運動の総称であり、正しい教義をめぐる論争に明け暮れていた教会ならびに人々の形骸化した信仰生活の実態を批判し、具体的な改革プログラムの提示を通じて、教理と生活の一致、すなわち聖書を糧とした生き生きとした信仰の実践を強く訴えるものであった。その歴史を紐解くとき、敬虔主義における敬虔の方向付けを行ったルター派のヨハン・アルント（1555-1621）や狭義の敬虔主義の創始者としてルター派の牧師ヤーコプ・シュペーナー（1635-1705）の名前が挙げられるが、敬虔主義はルター派だけでなく、改革派（カルヴァン派）にも見られる運動であった。

改革派敬虔主義は、オランダの改革派教会から大きな影響を受けながら、主としてドイツ北西部のカルヴァン派の地域に浸透し、その開始時期はおおよそシュペーナーの敬虔主義と重なっている。教会史家ヴァルマンは、ドイツ改革派教会における教会的敬虔主義の創始者としてテオドア・ウンダーアイク（1635-1693）、分離主義的敬虔主義の代表者としてジャン・ド・ラバディ（1610-1674）の名前を挙げている[5]。ユングが生まれ育った地域や開業医として活動した地域とその周辺は、こうした改革派敬虔主義の影響が浸透した地域であった。エルバーフェルトについて言えば、ヴィルヘルム・ホフマン（1676-1746）やその影響を受けたゲルハルト・テルシュテーゲン（1697-1769）に傾倒する人々がいた[6]。加えて注目すべき点は、熱狂者と呼ばれる人々も多く見られたことである。例えば、ユン

グの長編小説『テーオバルトあるいは熱狂者』(1784/85) に登場するフィラデルフィア共同体は、指導者エリアス・エラー (1690-1750) を中心に 18 世紀前半に活動したラディカルな信仰集団「シオンの子たち」をモデルとしているが、彼らはエルバーフェルト近郊のロンスドルフを根城としていた[7]。

２．ユングと敬虔主義

このように、エルバーフェルトとその周辺は、教会的敬虔主義者のみならず、ラディカル敬虔主義の総称で呼ばれる、教会離脱的で分離主義的な傾向を持ったさまざまな敬虔主義者が散在する、宗教的に極めて複雑な地域であった。その南東に位置するユングの生まれ育った地域[8]も事情は同じだった。ユングの自叙伝第 1 巻『ヘンリヒ・シュティリングの幼年時代．本当にあった話』(1777) には、父が母を亡くして悲しみに暮れていた時期に知り合ったニクラスという名の分離主義者から影響を受けたこと、息子ヘンリヒ (ユングのこと) は、その父から独自の宗教教育を施されたことが書かれている[9]。このニクラスという人物は分離主義者ヴィクトール・クリストフ・トゥーフフェルトとされているが[10]、結果的には、ユングも父親も改革派教会からの離脱を志向する分離主義に流れることはなかった。もっとも、彼を敬虔主義者とみなす人は後を絶たなかったが、そうした世間の見方と彼自身の自己認識との間にはずれがあった。

この関連で興味深いのは、ゲーテによるユング評価である。ゲーテは『詩と真実』第 9 章でシュトラースブルク大学時代の友人ユングのことを紹介しているが、彼の信仰について述べる際には、敬虔主義的な信仰に影響を受けていることを仄めかしつつも、「敬虔主義者」Pietist という呼称は一切使っていない[11]。ここには、ユングという人物をよく知るゲーテによる配慮が感じられる。というのも、ユングは敬虔主義の教えを自身の信仰の糧としながらも、「敬虔主義者」と呼ばれることは望まなかったからである。また、自らの信仰に特別なレッテルを貼られることも好まなかった。こうした姿勢は、『霊界からのシーン』第 2 部第 2 版 (1800/01) の巻頭言で「カルヴァン派、ヘルンフート派、敬虔主義者と呼ばれたくはない」[12]と明言していることからも推察される。ユングは、父親による宗教教育、生まれ育った地域や勤め先での人間関係を通じてさまざまな教えに親しんでいたが、そのうちの何か特定の形式にすがるのではなく、自らの考える真の信仰のあり方を模索し続けていたのである。

当然のことながら、この模索の試みは決して直線的なものではなかった。本稿で扱う 1770 年代から 1780 年代にかけては、最終的に独自の信仰の境地に至る途上の時期、すなわち啓蒙主義と対峙するなかで、いかに信仰と理性を融和させ得るかという問題に思いを巡らしていた時期にあたる。この頃のユングの信仰姿勢に激しい揺さ振りをかけていたのはヴォルフ＝ライプニッツ哲学であったとされるが、敬虔主義の信仰のあり方自体に疑問

を持ち始めた最大の契機は、やはり冒頭で触れたエルバーフェルト時代の体験であったと考えられる。

３．『家庭生活』における敬虔主義批判

では、ユングがエルバーフェルトで過ごした時期に、彼と敬虔主義者との間に何があったのか。ユングは彼らに何を批判され、逆に彼らの何を批判したのか。こうした点について、ユングの自叙伝第 4 巻『家庭生活』の前半部分を手がかりに検討する。

３－１．『家庭生活』について

自叙伝第 4 巻『家庭生活』の前半部分には、エルバーフェルトでの開業医時代の出来事が描かれている。副題には第 3 巻までと同様に「本当にあった話」Eine wahrhafte Geschichte と添えられているが、これは、自叙伝で書かれている主要なエピソードはすべて自らの人生で実際に起こった出来事であるというユングの認識によるものである。勿論、細部の描写にいたるまですべて事実と受け取ることはできないが、その内容は、ほぼ実際のユングの人生と一致している、と研究者間では了解されている[13]。それでもなお、ユングが自らの人生の歩みをどのように再構成し、提示しているかという点には注意を払わなければならない。まずは、第 4 巻前半の骨子となる内容を見ておきたい。

『家庭生活』の冒頭では、新天地での生活に期待を膨らませる主人公シュティリング（ユングのこと）の姿が描かれる。彼は「自分のこれからの人生と運命を楽しみにしていた。そして、自分の活動範囲が大きく、さらに広がっていくこと」（LG295）を確信し、「幸せな将来を夢見て」（LG295）、町の喧騒のなかに足を踏み入れる。しかし、実際には、主人公には様々な苦難が待ち受けている。なかでも、眼医者としての診療活動が当初予想していたように順風満帆とは行かず、そのせいで困窮した生活を強いられる。シュティリングは貧しい人々の目の治療には成功し評判を得るものの、彼らからはあまり診療代を受け取らないことが災いして負債がかさむ。他方で皮肉なことに、多くの収入が期待できる裕福な人々の目の手術にかぎって失敗してしまい、失意に沈む。後者のエピソードについては、友人ゲーテが『詩と真実』第 16 章で詳しく紹介している[14]。また、もともと体の弱かった妻クリスティーネの体調が思わしくなく、心労の絶えない状態が続いたことも語られている。

このように『家庭生活』では職業的・経済的・精神的に極めて不安定な苦難の生活の描写が中心となっている。しかし、終盤には、そうした苦境にある夫婦が「神の先慮」Vorsehung の結果として窮地を救われるというエピソードが挿入されており、『家庭生活』前半部のクライマックスともいうべき重要な位置を占めている。具体的に見てみよう。

1776 年の春、シュティリング夫婦は家主の都合で急遽、今の借家を出なければならなくなる。幸いにも友人の助けを得て、環境に恵まれた快適な新居を見つけることができたが、今の家を引き払うためには年 70 ターラーの家賃を支払わなければならない。しかし、シュティリングの貯蓄は底をついていた。そのため、家主に支払いの猶予を懇願し、二週間だけ待って貰えることになったものの、収入のあてもないまま、不安を胸に夫婦で神に必死に祈り続けるうちに、とうとう最終期限の日を迎えてしまう。ところが、最終日の朝 10 時にある郵便が届く。その中身は、115 ターラーの金貨とゲーテからの手紙であった。「彼（論者：シュティリング）はとても驚いてその手紙を開封して読んだ。――すると、友人ゲーテが自分の知らないうちに、自分が書いた物語の最初の部分に『シュティリングの幼年時代』というタイトルをつけて印刷させていたことが分かった。そしてここにあるのはその印税だった」（LG345）。ここでの「物語」seine Geschichte とは、ユングの自叙伝第 1 巻『幼年時代』のことである。主人公シュティリングはこの出来事を、神の先慮と結び付けて説明し、この場面を締めくくるのである[15]。

３－２．敬虔主義者によるユング批判

次に、ユングが敬虔主義者からどのような批判を受けていたかを『家庭生活』の内容に即して確認しつつ、ユングの敬虔主義批判を検討したい。敬虔主義者による批判の観点は、主として三点挙げることができる。

一点目は、ユングの信仰姿勢に対する批判である。その原因の一つは、ユングが旧知の敬虔主義者たちに宗教の話をしようと誘われたのを断り、いまはキリスト教信者としての義務について話すよりも、そうした義務を実践したいと伝えたからである。いま一つの原因は、ユングが敬虔主義者たちのいかなる会合にも顔を出さなかったからである（LG297）。こうしたユングの姿は、彼らの知るかつてのユング、すなわち「神に遣わされた天使としてとても温かいキスと祝福の言葉で持って迎え入れた」（LG296）ユングとは、さぞかし別人に見えたことだろう。というのも、自叙伝の第 3 巻にあるように、ユングがかつて診療のためこの地を訪れたときには、日曜の午後に、彼らの家に食事に招かれては、そこでキリスト教やその他の話題をしながら歓談のひと時を過ごしていたからである（LG255）。彼らの落胆に対して、ユングが払うべき代償は大きかった。ユングは「背教者」ein Abtrünnige（LG297）と見なされ、ことある度に陰口を叩かれた。すなわち「一言で言えば、シュティリングは彼の古い友人たちに完全に見捨てられただけでなく、誹謗中傷を受けることになった」（LG297）のである。

こうした仕打ちを下した敬虔主義者に対するユングの反論も見ておこう。ユングによれば、彼らは、人を裁くことを好む傾向が災いして、善き事柄もすべて台無しにしてしまう。また、自分たちと考えの一致しない人間や一緒に信仰の話をしない人間の価値を認めず、そういう人間を「再生していない」unwiedergeboren（LG297）人間と見なす。こうした信

仰は「口だけのキリスト教」das Maulchristentum（LG297）でしかなく、そこに実践が伴わないようであれば意味がないといった内容の批判を加えている。しかし、彼らのことをいかに批判しようとも、いわば村八分的な状況に陥ったユングは、医者としても彼らに必要とされず、町で商売を営む富裕層からも相手にされず、社会的・職業的に孤立する結果となる。

二点目は、ユングの創作活動に対する批判である。1772 年の秋頃、医者としての稼ぎが乏しく、生活に喘いでいたユングは、知人の紹介でデュッセルドルフ在住のヤコービ兄弟との知己を得る。この出会いがきっかけとなり、ヴィーラントが主催する文学雑誌『ドイツのメルクール』（1773）にユングの処女作『アゼ＝ナイタ．オリエントの話』（ただし匿名）が掲載された。これは、ユングの書きかけの原稿（後の自叙伝）を目にしたヤコービ兄弟がユングの文才に目を留め、創作活動を鼓舞した結果であった。彼らは、お互いの訪問や書簡のやり取りを通じて、苦境にあったユングを支える存在にもなったと『家庭生活』には記されている（LG310）。

では、こうした創作活動の何が問題だったのか。自叙伝によれば、ヤコービ兄弟との人間関係自体が、町の人びと、とりわけ敬虔主義者の間でますます嫌われる原因になったという（LG310）。また、その理由は、エルバーフェルトの敬虔主義者は自らの信仰信条に関して融通が効かず、自分たちと少しでも考え方の違う人間を許容しないからとしている（LG310）。ここに重要な問題が関係している。それは、敬虔主義者の間で見られた芸術敵視の姿勢である[16]。すなわち、ヤコービ兄弟はまさにユングを創作の道へと誘い、彼ら自身も創作活動に携わる人間だったので、問題視されたのである。ユングによれば、宗教とかかわりのない詩あるいは小説（それがたとえ道徳的な内容であったとしても）を書く者は無神論者のレッテルを貼られ、嫌われたという（LG310）。

三点目として挙げられるのは、ユングが大きくかかわった二つの社会活動に対する批判である。一つ目は、ある会合での活動である（LG343）[17]。これは、身分が高く、教養のある町の男性たちを構成員とする会員制の会合で、毎週水曜の晩に開催され、有用な書物を読み、さまざまなテーマについて話し合うことを通じて、人格の陶冶を目指すものであった。また、定期的な会費徴収のおかげで、精選された書籍を揃えた図書館が生まれ、共同での利用も可能にもなり、その後もさらに充実していった。この会合では、希望者がアカデミックな内容の発表をする機会も設けられ、こうした機会を通じてユングはその才能を認められ、会員である町の教養層からさまざまな支援を得ることができた[18]。二つ目は、エルバーフェルト近郊で発見された鉱泉と関係する活動である（LG343f.）。ユングは友人といっしょにこの鉱泉の研究にあたったが、この関係で鉱泉医の職務も与えられることになったようである。

では、こうした社会活動がなぜ批判の対象となったのか。自叙伝には「これらのどちらの人間関係も、彼（論者：シュティリング）に対する敬虔主義者たちの怒りをさらに強める結果をもたらした。彼らの目には、世俗の人々との付き合いが増えていると映ったので

ある。こうした屁理屈や中傷は留まるところを知らなかった」（LG344）とある。さらにユングは、彼らが「裁くなかれ」と説いた偉大なイエスの教えをほんの少しか守っていないことを嘆き、その姿勢をパリサイ派の人々に例えている。この一節からは、ユングが、エルバーフェルトの敬虔主義者たちが、ユングの行動や態度に逐一批判を加えることに辟易し、彼らの態度が真の信仰とは相容れないものであると強く感じていたことが窺える。

３－３．ユングによる敬虔主義批判

前節では、ユングが敬虔主義者から受けた批判を、ユングの信仰、創作活動、そして世俗的な活動の三点に大別したが、それらに対するユングの批判の検証からは、ユングと敬虔主義者との間にさまざまな面で隔たりがあること、そしてまた、ユングの批判の矛先が一般のキリスト教徒ではなく、はっきりと敬虔主義者に向けられていることが見えてくる。後者は、第３巻『ヘンリヒ・シュティリングの修業時代．本当にあった話』（1778）で見られたように「神を畏れ敬う信心深い人々」（LG255）とあいまいに表現するのではなく、明確に「敬虔主義者」と呼んでいることからも窺える。

こうしたユングの批判には、まずもって同時代においてあるいは従来から敬虔主義を批判する際にしばしば用いられたシェーマが見て取れる。例えば、『家庭生活』で見られた、実践の伴わない形骸化した信仰（似非信心）、不寛容、他人の信仰姿勢を裁く独善的な態度、あるいは「口だけのキリスト教」といった指摘は、敬虔主義批判の常套句である。また、ユングの創作活動との関係で言及した、ダンスなどの娯楽や小説を含む文学一般や演劇などの芸術活動を敵視する傾向についても同様である。一方、ユングの世俗的な活動への批判に対する反論からは、エルバーフェルトの敬虔主義者を、理不尽で不毛な批判を繰り返す人々とみなしている態度が窺えるが、その原因を辿るならば、町での再会の瞬間からこじれ始めた人間関係にすべてが帰着するようにも思われる[19]。それゆえ研究者のなかには、ユングの人づきあいの不器用さ、医者の肩書きという社会的成功の証をもつユングへの周囲の妬みを指摘するものもいる[20]。そういう意味では、自叙伝で描かれているのは、極めて皮相な敬虔主義批判のようにも見える。

しかし、ユングの敬虔主義批判をさらに踏み込んで検討するならば、また別の側面も見えてくる。それは、彼が敬虔主義者を十把一絡げに全否定はせず、善き敬虔主義者とそうでない者を慎重に区別する視点が持ち込まれていることである。例えば、敬虔主義者のなかには「きわめて誠実な人々」や「とても優れたキリスト教信者」がいると述べたり（LG297）、ヤコービ兄弟との交流や創作活動への批判との関連では、エルバーフェルトの住人（この文脈では敬虔主義者のこと）のすべてがそう考えていたわけではない（LG310）と述べたりしている。また、彼らが普段は本当に善良な人々（LG344）であるとも述べている。

こうした姿勢は、エルバーフェルト時代のほぼ最後の場面に挿入された敬虔主義者への批判からも窺える。ただしそれは、上述したようなユングの何か具体的な態度・行動に対

する批判への反応ではない。エルバーフェルト時代を総括する形で、作者自身から発せられる言葉である。「作者自身」が、というのは、これまで三人称の形で主人公シュティリングのことを語ってきた作者ユングが、急に一人称 ich で語り始めるからである。以下、概略の形で具体的に見てみよう。

ユングはまず、エルバーフェルトの住人について語る。そして、『家庭生活』を読んだ読者は、この町にとても不快な印象を持つ可能性が十分にあるが、自分自身も同じ印象を持っていると告白する。また、ここで書いた内容が真実である以上、住人たちも恨みに思うはずはないと述べる。ただし、こうした悪い評判は、ごく少数の高潔な人々には該当しないとして、具体的に三種類の人間を挙げる。すなわち、日々の生活のために懸命に働く人々、気高い感性を育もうとする人々、神への真の愛に加えて一緒にいる仲間たちに対する真の隣人愛をいつも持っている人々である。そのうえで、この地に神の祝福があることを願い、どんな誘惑のもとでも勇気と信仰を固く保持し、時代の風潮に流されないようにすれば、神や人々の前で栄誉に与ることができると諭している（LG364f.）。このように、エルバーフェルトの人々への批判はあくまで限定的なものである。また、最後は住人全体に対する神の祝福を願って結んでいる。

しかしこれで終わりではない。敬虔主義者たちに対するユングの評価がこの後に続く。

> しかし、とりわけこの地の敬虔主義者たちは、私がこうして公に、彼らのことをありのままに書いたことで受ける苦しみを大げさに言いふらすことでしょう――ただしこれも、彼らのうち、この非難に値する人々にのみ該当することです。彼らはなぜ信仰や神への畏敬の念という看板を掲げているのでしょう？それなのになぜ、信仰や神への畏敬の念が求めることを行わないのでしょう？――キリスト教があらゆる方面から戦いを挑まれ、誹謗中傷に晒されている今日において、信仰を大切にする誠実な人間は、行動するしかありません。必要なとき以外は、口を閉ざしていなければなりません。主はそれをご覧になって、正しく裁いてくださるでしょう（LG365）。

上記の二つの引用にはエルバーフェルトの町の人びと、そして敬虔主義者たちに対する複雑な心情が吐露されている。この町での苦難の記憶を辿り、そのときの様々な感情を思い起こしながら、しかし抑制をもって振り絞る声のようにも聞こえる。いずれにしても「この地の敬虔主義者たち」diese dortigen Pietisten とあるように、批判の対象はあくまでエルバーフェルトの敬虔主義者であり、そこへさらに敬虔主義者同士を区別する視点が含まれていることが確認できるだろう。

しかしながら、本当に非難されるべき敬虔主義者については、個別にやり玉にあげて批判することもできたはずである。ユングがあくまで抑制的に批判しているのはなぜか。この理由としては、二つの観点が考えられる。

一つ目の観点は、『家庭生活』に挿入されているフリードリヒ・ニコライ（1733-1811）

との論争をめぐるエピソードに手がかりがある。1774 年、ユングはベルリンの啓蒙主義者ニコライが発表した長編小説『学士ゼバルドゥス・ノートアンカー氏の生活と意見』（1773-76）の内容に抗議する形で『「ゼバルドゥス・ノートアンカー」の著者で軽蔑すべき俗物に対する牧童の投石具』(1775）を出版した。しかしその際の反論があまりに激し過ぎたことを反省し、その旨を『家庭生活』のなかに綴っている。ユングによれば、ニコライの小説に描かれた宗教に対する辛辣な風刺、敬虔主義者ばかりか、本当に敬虔な人々までも笑いものにする態度に我慢できなかったことが論争的な著作の執筆の動機であると記している。さらに次のようにも述べている。

> 彼自身、敬虔主義者たちには不満があったし、彼らのことで多くのことに耐えなければならなかったが、そうはいっても、彼らに対する嘲笑は耐え難かった。信仰における過ちは、悲しいことであり、残念なことと思わねばならないが、それを笑い物にする必要はないと考えたからである。なぜなら、そういう態度をとることによって、信仰自体が嘲笑されることになりかねないからである(LG342)。

この引用箇所を踏まえるならば、ユングが敬虔主義者を徹底的に批判することを避けた理由も見えてくる。すなわち、一部の敬虔主義者に対する過度な批判は、善き敬虔主義者をも傷つけるばかりか、キリスト教自体を批判する行為と誤解されかねず、本末転倒の結果を招くと判断したからであろう。だからこそ、一つ前の引用箇所の最後では、最終的な裁きは主に委ねるという判断を下したのである。

二つ目の観点としては、やはりこの自叙伝が書かれた本来の目的との関連を考えなければならない。ユングの 1778 年時点での認識によれば、そもそも自叙伝を執筆した目的は、これを読む人の信仰促進にあり、神の先慮に導かれてきた自らの人生の歩みを人々に示すことにあった[21]。また『家庭生活』の後半部分の最後では、「しかし、わたしはシュティリングの全人生とその足跡を書いたのではなく、神の導きのもとにある先慮の話を書いたのです」と述べている（LG431)。こういった発言から、自らの人生と神の先慮との関係を示すことが主たる目的であることが窺える。そのため、一部の敬虔主義者の言動を細々と取り上げて、それに徹底的な批判を加えなくても、エルバーフェルト時代のユングが敬虔主義者からどのような批判を受けたか、それがいかに理不尽なものであったか、その批判のせいで町での日常生活や職業生活において、いかに大きな不自由を強いられ、苦境に陥ったかということさえ伝われば、それで十分なのである。

また、『家庭生活』では最終的に世俗的な成功を収めた主人公の姿が描かれているが、その状況もまた神の先慮との関係に置かれている。この点に鑑みると、ユングがエルバーフェルトで味わった苦難にしても、すべては神が与えた試練として、すなわち神の計画、神の先慮の結果として乗り越えるべきもの、その後の幸福な人生につながるものであり、それゆえに積極的な意味を持っていたと捉えることができるだろう。

以上のように、ユングの敬虔主義批判には、彼の考える信仰のあり方からは乖離した、エルバーフェルトの一部の敬虔主義者の信仰姿勢に対する深い憂慮が読み取れるが、こういった批判を神の先慮との関連でさらに踏み込んで検討するならば、いま一つ重要な問題が見えてくるように思われる。それは、ユングの創作活動をめぐる問題である。

４．神の先慮とユングの創作活動

第 3 巻までと比べると、『家庭生活』には「神の先慮」という言葉の登場回数が増えている[22]。しかし、この言葉と結び付けられているすべての出来事が、ほぼ同等の重要性を持って描かれているようには見えない。最も印象的に描かれているのは、第 3 章第 1 節でも述べた、ゲーテの仲介による自叙伝第 1 巻の出版によって、夫婦の窮地が救われるというエピソードであるが、この話は、自らの創作活動の正当性を主張しようとするユングの意識と強く結び付けられていると考えられる。というのも、この話はその後に続くユングの苦難のエピソードと対置されているため、神の先慮との関係がさらに際立って見えるからである。

まず、ユングの創作活動が神の先慮とどう結び付けられているかを確認しておきたい。すでに触れたように、そもそもはヤコービ兄弟との出会いから始まる。彼らはユングに作品の執筆・掲載を薦め、自叙伝執筆の継続を促したが、ユングの創作活動への関与は「無神論者」Freigeist という言葉でもって敬虔主義者に激しく批判されることになった。一方、そのまま執筆を継続していた自叙伝の原稿は、ゲーテがエルバーフェルトを訪れた際に持ち帰り、のちに出版される運びとなった。神の先慮は、こうした一連の執筆活動、ならびにその成果と密接に結び付けられているのである。このことは『家庭生活』の以下の一節に示唆されている。

> シュティリング（論者：ユング）とゲーテの友情、ゲーテがシェーネンタール（論者：エルバーフェルト）を訪れたことに対して、神に選ばれし者であることを欲する人々（論者：敬虔主義者）は、とても激しい誹謗中傷を浴びせた。人々は彼を無神論者とみなして身震いし、彼と交流しているかどでシュティリングを軽蔑した。しかしこのことは、神の徒（論者：ユング）に試練を与え、神の誠実さを確信させ、さらに成長させる目的から、永遠なる愛（論者：神）によって与えられた計画であり準備だったのだ（LG346）。

この箇所は、敬虔主義者による批判が、ユングに与えられた神の試練であったことを強調しているだけではない。ヤコービ兄弟に鼓舞され、ゲーテとの交流を通じて実現した自叙伝の出版、そしてその印税によりユングが苦境を脱したという一連の流れが、神の先慮と

の関連で語られることにより、エルバーフェルトの敬虔主義者が否定した創作活動がきわめて肯定的な文脈に置かれ、その意義が強調されているのである。さらにいえば、自叙伝の執筆をはじめとする創作活動は、どんな苦難においても成し遂げるべき仕事であったとみなされているのである。

次に見るのは、彼の創作活動に対する批判の実態が窺い知れるエピソードである。ユングは自叙伝を出版したことで名声を得るが、このことは町の人びとから激しい批判を受ける結果を招く。それればかりか、誰かによって、頭がおかしくなったという根拠のない噂まで流されたことにより、患者の足がぱったりと途絶えてしまい、この町で生活を続けることが困難なほど、精神的な苦痛を蒙るのである。ユングは自叙伝を出版したことへの批判に対して、次のように書いている。

> しかし、この作品のせいでシェーネンターラー（論者：エルバーフェルト）の人々に私が無神論者という疑いを持たれようとは、いったい誰が想像できただろうか。――理解し難いことであるが、紛れもない事実であった。人々は、彼のことを小説の主人公とか空想家と呼び、改革派教会の教えに明らかに反した考え方を見つけ出そうとした。また、彼のことを信仰心のかけらもない男だと断言した（LG348）。

この出版を契機に、彼への誹謗中傷はエスカレートする。そして「理性を完全に失った」（LG349）という噂が流れた時期のことは、「1777 年の秋のこと、そうした誹謗中傷は、悪意の頂点に達した」（LG348）と記している。また、町の人々が自分に向ける奇異な視線を避けるため、ほとんど外出せずに家に閉じこもらざるを得なかった苦しみについて「この新たな苦しみを想像できる人は誰もいないでしょう。あまりにも奇妙で、しかもそれに耐えるまったく特別な力が必要になるくらい、とても辛いものなのです。」（LG349）と当時の心境を訴える。さらに、町で流れている自分の噂を初めて家主から聞かされた時に、悲しみや困惑、憤りなどの様々な感情に同時に襲われたことを吐露している。

ただしユングは、このエピソードとの関連で、一度も「敬虔主義者」という表現を使っていない。そのため、このエピソードは、第 3 章第 2 節において敬虔主義者からの批判を検討する際には取り上げなかった。しかしながら、ユングが自叙伝第 3 巻を出版した後で、ある雑誌に投稿した記事には、彼らの関与をほのめかす発言が見られる。そこには、自叙伝第 1 巻が当地の敬虔主義者たちに批判されたので、不本意ながらも彼らに妥協し、第 2 巻、第 3 巻の作風の変更を余儀なくされたと記されている[23]。これは、ユングの創作活動に対する敬虔主義者たちからの圧力や批判が極めて強かったことを示す事実である。また、ヤコービ兄弟やゲーテとの交流を通じた創作活動に敬虔主義者たちが批判的だったことはすでに指摘した通りである。したがって、たとえユングがこの箇所で一度も「敬虔主義者」の名前を出さなかったとはいえ、ユングの創作活動批判の急先鋒として、そしてまた、あらぬ噂の張本人として、エルバーフェルトの敬虔主義者たちの存在を意識していた可能性

が高いと言えるだろう[24]。

以上の考察を踏まえるならば、ユングが『家庭生活』を執筆し、そこに敬虔主義批判を絡めた狙いの一つは、創作を含めた自らの執筆活動が、決して信仰にそむくような行為ではないことを示すことにあったと考えられる。すなわち、第3巻（1778）を出版してから、第4巻『家庭生活』（1789）が出るまでに10年以上の歳月が過ぎていたが、ここにきてようやくユングは、エルバーフェルトの敬虔主義者たちの実態と彼らへの批判を、あたかもその是非を世に問うような形で描くことが可能となり、なおかつ、自らの人生が常に神の先慮のもとにあったこと、そしてまた、自らの創作活動が敬虔な信仰と両立し得るものであることを示したのである。

おわりに

ところで、自叙伝第4巻『家庭生活』が出版されるまでの間、ユングが敬虔主義者にたいして沈黙を貫き、無批判でいたわけでは決してない。第3巻を完成させた後にエルバーフェルトの地を離れたユングは、大学教授として招聘されたカイザースラウテルン、そしてハイデルベルクに活躍の場を移しているが、この間に四つの小説を発表しており、そのいずれにおいても敬虔主義に対する批判が見られる。このうち、本論でも少し言及したが、第四作目にあたる『テーオバルトあるいは熱狂者』については、特別な考察が必要になる。というのは、この作品が他の三作品とは異なる独特な構成になっていること、テーマとして熱狂の問題を中心に据えていること、そして何よりも、作品の素材としてエルバーフェルトとその一帯の敬虔主義に関する出来事と自伝的なエピソードを多く取り込む形で描かれているからである。この小説の分析を手がかりとしたユングの敬虔主義批判と熱狂をめぐる問題については、稿を改めて論じることにしたい。

テクスト

Jung-Stilling, Johann Heinrich: J. H. Jungs Lebensgeschichte. Johann Heinrich Jung genannt Stilling. Sämtliche Schriften. Band 1. Hildesheim [u.a.] 1979. 本文および注で引用する際にはLGと略記し、横にページ番号を添えた。

---

1 ユングは、シュトラースブルク大学で医学を学ぶ以前に、ある人物からの手ほどきにより医療の知識を得ていた。そのため、本業で工場支配人や家庭教師をする傍ら、診察のため、近隣の町を訪れていた。エルバーフェルトも幾度か訪ねていため、この町の敬虔主義者とはその際に知り合ったと考えられる。エルバーフェルト近郊の町ロンスドルフ出身の最初の妻クリスティーネともこうした活動のなかで出会った。

2 自叙伝第4巻『家庭生活』は、前半ではユングのエルバーフェルト時代、すなわち開業医時代の出来

事を、後半では、その後大学教授としてカイザースラウテルン大学、ハイデルベルク大学、マールブルク大学で教鞭をとった時代の出来事を扱っている。家庭生活との関連で言えば、前半から後半の途中にかけては最初の妻クリスティーネとの結婚生活が、その後はクリスティーネの死後に再婚した妻ゼルマとの結婚生活が描かれている。本論の中心テーマとなるユングの敬虔主義批判については、前半のエルバーフェルト時代の描写のなかに集中しているため、分析の対象を前半部分のテクストに絞ることとした。なお、レクラム文庫版には、エルバーフェルト時代の途中までしか所収されていない。Vgl. Jung-Stilling, Johann Heinrich: Henrich Stillings Jugend, Jünglingsjahre, Wanderschaft und häusliches Leben. Mit einem Nachwort und Anmerkungen von Dieter Cunz. Stuttgart 2013.

3 Vgl. Hinske, Norbert(Hg.): Die Aufklärung und die Schwärmer. Hamburg 1988, S. 4f.

4 このテーマに関しては、ハーンの研究書を参照。Vgl. Hahn, Otto W.: Jung-Stilling zwischen Pietismus und Aufklärung. Sein Leben und sein literarisches Werk 1778-1787. Frankfurt am Main[u.a.] 1988, S. 1-36. フェルケルはユングを敬虔主義者としつつも、この点はユングの敬虔主義批判を考慮した特別な考察が必要であるとしている。Vgl. Völkel, Martin: Jung-Stilling. Ein Heimweh muß doch eine Heimat haben. Annäherungen an Leben und Werk 1740-1817. Nordhausen 2008, S. 85-90.

5 Vgl. Wallmann, Johannes: Der Pietismus. Göttingen 2005, S. 49.

6 Vgl. Brecht, Martin u. Deppermann, Klaus(Hg.): Geschichte des Pietismus. Der Pietismus im achtzehnten Jahrhundert. Bd. 2. Göttingen 1995, S. 372-427(hier v.a. S. 373, 388f., 400, u. 404.).

7 Vgl. Ebd., S. 411-419. なお、ユングはロンスドルフ出身の妻クリスティーネとその家族を通じてこの集団の詳しい情報を得ていたと推察される。ロンスドルフはこの集団の部落から発展した町で、1745年に都市権を得た。現在はヴッパータール市の一部になっている。

8 ユングは、ドイツ中西部ナッサウ＝ジーゲン侯国ヒルヒェンバッハ近くの山村グルントに生まれた。

9 Vgl. LG47-55.

10 Vgl. Vinke, Rainer: Jung-Stilling und die Aufklärung. Die polemischen Schriften Johann Heinrich Jung-Stillings gegen Friedrich Nicolai(1775/76). Stuttgart 1987, S. 32-37.

11 Müller, Klaus-Detlef(Hg.): Johann Wolfgang Goethe. Aus meinem Leben. Dichtung und Wahrheit. Frankfurt am Main 1986, S. 403-405.

12 ここでは「カルヴァン派」と訳したが、原文にある Calvinist はややネガティブなニュアンスで用いられている。Vgl. Jung-Stilling, Johann Heinrich: Scenen aus dem Geisterreich. Sämtliche Schriften. Bd. 2. Hildesheim [u.a.] 1979, S. 7f.

13 ただし、地名や人名の表記は実際と異なるため、注意が必要である。『家庭生活』に頻出する地名で言えば、「エルバーフェルト」Elberfeld は「シェーネンタール」Schönenthal、「ロンスバッハ」Ronsbach は「ラーゼンバッハ」Rasenbach ないしは「ローゼンバッハ」Rosenbach、「デュッセルドルフ」Düsseldorf は「リュッセルシュタイン」Rüsselstein と表記されている。

14 Vgl. Müller(Hg.): Goethe. Dichtung und Wahrheit. S. 740-747.

15 1774 年 7 月 22 日、ラーヴァーターらと一緒にライン河畔の町をめぐっていたゲーテは、エルバーフェルトのユングの元を訪れた。自叙伝の原稿はその時にユングから受け取っていた（LG326）。なお、同日この町で開催された会合には、彼らの他に、ヤコービ兄弟（Friedrich Heinrich Jacobi:1743-1819, Johann Georg Jacobi: 1740-1814）、作家ヴィルヘルム・ハインゼ Wilhelm Heinse（1746-1803）、教育者ハーゼンカンプ Johann Gerhard Hasenkamp（1736-1777）などが出席した。詳細は以下を参照。Vgl. Goethes Jugendfreund Johann Heinrich Jung-Stilling im Siegerland und im Bergischen Land. Ausstellung. Universitätsbibliothek Siegen 1999, S. 47-49.

16 Vgl. Schrader, Hans-Jürgen: Die Literatur des Pietismus. In: Brecht, Martin[u.a.](Hg.): Geschichte des Pietismus. Bd. 4. Glaubenswelt und Lebenswelten. Göttingen 2004, S. 392.

17 「エルバーフェルト読書協会」Die Elberfelder Lesegesellschaft あるいは「水曜協会」Mittwochgesellschaft と呼ばれる組織の会合のこと。注 15 で述べたゲーテのエルバーフェルト訪問の影響をうけて設立された。設立当初のメンバーはユングを含めて 8 名だったが、その後 27 名となり、地域の文化的発展に寄与した。Vgl. Mertens, Erich: Jung-Stilling im Bergischen Land. Jung-Stilling-Gesellschaft Siegen 1995, S. 103-105.

18 自叙伝には、ユングは数学者レオンハルト・オイラー(1707-83)の著作や物理学に関する話題をした（LG343）とあるが、他にも医学や神学、哲学に関するテーマで話題提供している。Vgl. Mertens, Erich: a.a.O., S. 105-107.

19 例えば、ユングはかつての友人である敬虔主義者たちが自分を見ても遠くから軽くあいさつするだけで、態度が冷たかったと書いているが、その理由を以前とは異なる自分の世俗的な服装のせいだとし、自らの非を認める描写もある（LG296f.）。

20 エルバーフェルトの敬虔主義者たちは、ユングの世俗的な活動に彼の出世欲や社会的成功への野心を感じ取り、良い印象を持たなかったとも考えられる。ヴィラートは、敬虔主義者の社会階層に着目し、

ユングの活動を分析している。Vgl.Willert, Albrecht: Religiöse Existenz und literarische Produktion. Jung-Stillings Autobiographie und seine frühen Romane. Frankfurt am Main und Bern 1982, S. 71-73.

[21] Vgl. Jung-Stilling, Johann Heinrich: Antwort auf den Auszug eines Briefs über Stillings Wanderungen. In: Rheinische Beiträge zur Gelehrsamkeit. 4tes Heft. Den 1. Ostermonat 1779, S. 295. また、長谷川健一「ユング＝シュティリングにおける信仰と創作―『ヨリンゲルとヨリンデの話』を手がかりに―」『ドイツ啓蒙主義研究』14　大阪大学大学院言語文化研究科　2016 年、6―8 頁も参照。

[22] そのため、第 4 巻『家庭生活』をユングの自己弁明ないしは自己弁護の書とみなす研究もある。Vgl. Niggl, Günter: Geschichte der deutschen Autobiographie im 18. Jahrhundert. Stuttgart 1977, S. 73f. ; Hirzel, Martin: Lebensgeschichte als Verkündigung. Göttingen 1998, S. 55-57. しかしその場合でも、ユングの敬虔主義批判との関連では、第 3 巻（1778）と第 4 巻（1789）との間に 10 年以上の出版年の開きがあることには特別な注意を払う必要がある。すぐにでも書けたはずの続編を書かなかった理由の一つは、エルバーフェルト時代の敬虔主義者と自らの信仰姿勢との関係を整理・清算できる状態になるまでに多くの時間を擁したからと考えられる。それはエルバーフェルト体験がユングに与えた衝撃の大きさを物語っている。創作活動についてもその是非を常に問い続けていたと推察される。だからこそ、『家庭生活』に神の先慮という表現が頻出するとはいえ、その描写の強度には差があり、そのうち最も印象的に表現されているエピソードが、敬虔主義者からの批判、なかでも自叙伝出版との関係において描かれているのである。

[23] Vgl. Jung-Stilling: Antwort auf den Auszug eines Briefs über Stillings Wanderungen. S. 296f.

[24] それでもなお、ユングは創作を止めなかった。『家庭生活』には、彼が第 1 巻の出版後もエルバーフェルトを去るまで続編を書き続け、さらには、無神論者という嫌疑を晴らすために『フォン・モルゲンタウ氏の物語』（1779）という小説まで書いたと記されている（LG348）。こうした姿勢からも、創作活動へのユングの強い思い入れが窺い知れる。